



お試し版のため再度下げています

お試し版

これまでの事（遺跡探索リシュナ）

リシュナは街で悪い噂の立つ格好からして目立つ女だつた。
「ねえ、雇われてくれない？」

そんな彼女からの依頼に興味を引かれて遺跡探索に同行し
素性を探るつもりでいたが、思いはあつけなく碎かれる。

格好はそれでも中身は芯を持った女で、

探索の途中で話をする内に、噂が協会の息子の流した戯言たわごとだと知る。
噂によつて雇える人間が見つからず、活動できなかつた彼女が
どうしても調べたかつた遺跡、それを最奥まで付き添う。

その奥で見つかった物は遺物でも財宝でもなく、
彼女が探していた『記録』の巨大石板だつた。

危険とは無縁に思えた遺跡探索は、

その石板の突然の落下によつて窮地きゅうじに陥るが

リシュナはそれを反射の魔法によつて受け止める無謀な行動に出る。
身動きできなくなつた彼女を今度は自分が走り抱えることで
共に潰れかねない危機を、無理やり切り抜けた。

直後、石板落下の衝撃で遺跡は崩壊を始める。

そんな中でリシュナは同行してくれた俺に報いるためと
落下してきた宝物、大判金貨4枚を装備を壊しながら取得、
疲労で動けなくなつた彼女を抱えて脱出する。

金貨を半分ずつ分け一度は別れたものの、彼女の最後の言葉、
「自分にかかつた忌まわしい『呪い』を解きたい。

それにまつわる地名があの石板にあつた。」

その言葉が忘れられず、街で彼女を探す。

時を置かずに再会を果たし、リシュナの呪いの一端を知る。
『悪魔の眼』そう言える症状を彼女は、

拒絶・流布るふされる危険もある中で

俺の「見たい」という言葉に応じてくれる。

不安(負)の感情に心悩まされ、目を合わせた者の精神を乱すその眼。

今この時、この世界にないものを見て、そして興味を持つた。
彼女の事に。

これまでの事（荒ぶる拳闘娘）

リシュナとの生還の祝杯の後、酔いつぶれた彼女を宿に預けてきた際にある女に絡まれる。

拳闘賭博を生業^{なりわい}にしているその女は、自分も用があつたという遺跡が俺達によつて崩壊させられ、詳細が掴めなくなり教えるという。だがその反発的な態度と酒の入りによつて拒んだ俺に拳闘女リネッタは情報を賭けて勝負を挑んでくる。

最終的にとある部位を集中攻撃し沈めるも

彼女は色仕掛けに転じ、その際に『眼』を確認してしまう。リシュナのみならず、自分の不調の原因を探す者がここにもいた。彼女の行動に動搖しながらもその眼で察した俺はリネットに情報提供するための機会を作ると約束する。悪魔の眼、そんな症状が一体どこから――。

悪酔いから醒めたリシュナと再会し、記憶転写魔法で脳裏に焼き付けた石板の碑文全てが読み解けた彼女は『白岩石の祭祀場^{さいしじょう}』

という今では聞かない古い地名を示す。

俺も協力することを伝えるが、この時点ですでにリシュナは記憶の文面から自分の体に何が起つているかが分かつてしまっていた。魔眼という変化だけではなく、そもそも『呪い』ではない事を。それがその時、俺に語られる事はなかつた。

これまでの事（手蔓を求む先の闇）

白岩石の祭祀場という古代の地名、街にある文献では見つからず俺達は途方にくれるが、最後の手がかりとして選んだ場所、

『王立魔学院』

魔法・術による統治を目的として古くから各都市に根付く団体。同時に古代の文献や記録を集積し、かつて昔にあった古代魔法を復活させる目的を掲げている。

しかし一般人に理解されない不明瞭な活動も行っているため、街の人間の中には不信感を持つ者も少なくなかつた。リシュナの魔眼を万一に気づかれては——という不安のためあえて避けていた場所であつた。

結果的には学院書庫に古代の地理を記す書物はなかつたもののそこに務める魔学士の提案により、手つかずの学院地下の遺跡探索を許される。

そこで見つけた封印された一室と魔法でしか開かない古い本。

神代文字という古い文字が読めるリシュナはその解読を決意し手空きとなつた自分は終えるまでの間、行きつけとなつた酒場の姉さんの仕事を手伝う事にした。

この時、リシュナの変わりない様子を見て事態を楽観視していた。

今は使われない魔法仕掛けの本、

答えがあると信じリシュナは地下で解読に没頭する日々を、

俺は彼女を支えつつ、店主のイゼラが営む酒場の手伝いを続けた。

だが、本に求める答えはなかつた。

希望を絶たれたリシュナは感情的に。

そして自分と付き合つていては足枷あしかせになると想い、

その理由として今まで語られなかつた碑文の内容を告げてきた。

それは、彼女が人の精神をかき乱す眼だけでなく、

か、
に

しまつてているという事実。

碑文は救済ではなく、ソレを造る手順書でしかなかつた事。

心が負に堕ちて荒れるばかりでなく、

られない。

その事で俺が離れていくのが怖くて明かせなかつたと彼女は謝罪し、

言葉を失つた俺の前から姿を消してしまう。

彼女が調べた内のー冊が過去の歴史の記録である事を
せめてもと書き記し魔学院に提出。

リシュナの境遇に助力できず自分に何が出来るのか自問自答する。

そんな時に、同じく魔眼を持つリネッタとの再会、

現状と魔眼の事実を知つた彼女からの言葉によつて気づかされる。

「貴方は一緒にいる理由を、気持ちを『言葉』で伝えたの？」

：リシュナの事実にただ圧倒され、彼女が何に不安を感じているのか
正しく考えることも、伝えることもできていなかつた。

本編のあらすじに続く

お試し版

本編ではモザイクはありません



剣と魔法があつても悪魔は過去のものとなつた世界。
その過去の残滓さんしは去ることなく人を蝕むしばむ。
沈みゆく人を救う方法は男の手の内になく、
ひたすらにただ、足搔あがくのみだつた。

お試し版

|| 抗う術もなく ||

あらが

リシユナが解読していた荒れ放題の古代の部屋にて。

人ならざる気配が俺やリシユナだけでなく部屋全体包み込んでくる。この女は一体なんなんだ……？

とても同じ人間とは思えない気を発している。

「原神：蓄体……。あんたは……一体、何を言つているんだ？」

「いずれ分かるでしょう。貴方にも来て頂きますから。

もつとも、その時にその知性が残つていれば、の話ですが。」

「邪な目的でリシユナに呪いをかけた事は、間違いなさそうだ。」

女の悪威に圧おされるが、

反発の感情でからうじて言葉を吐く。

「呪いではなく、祝福です。

：配下の者に人選は任せましたが、今回は失策が多いようですね。上も予定通りには事が運んでいない様子……。

せつかくマキ様の力を預けたというのに……。

あの子達も、なつてもらう他ありませんか……。」

「じ、じやあ、貴方が……貴方が……わたしをこんな目に……！」

リシユナも精一杯抗いながら声を吐く。

「こんな目とは……すいぶんと気丈な方のようですね。

楽しめそう。貴方達2人が絶望に飲まれゆく様はどんなものか、見ものですよ……。さて……」

そう言うや否や、……………の女の姿が消える。

瞬間に握っていたリシユナの手の感触も消える。

「ぐうっ！」

「!?」

本編に続く

お試し版



感乱

酒場と地下を行き来する日々が日常になり、

「なんだって……見つからなかつたなんて…。」

遺跡の隠し部屋で、目を押さえてぐつたりするリ・シユナに問いかける。

「…だけど、どこにもないの。」

押さえる手を離すと、リ・シユナは魔眼が発現してしまっている。

「お、おい…。」

顔から視線を逸らしてみせると、ハッと察して目を開じ頭を振り始める。そしてゆっくり深呼吸して自分を落ちつかせる彼女。

日を追うごとにリ・シユナの顔から笑顔が消えていくといつていった。

それにうすうす気づいてはいたが、いつもどおりの接し方しかできなか

る。寝み終えるまでの辛抱だと、

彼女の目の下が黒くなっている。

「…うんね…このところ、読みはなしだつたから。」

「…うなのか。というか…お前、魔力も消費するというのに、

休憩も入れなかつたのか。」



遺跡探索 リ・シユナさん^{くわう}の愚行

遺跡探索 リ・シユナ^{くわう}の愚行 手裏を求む先の間



荒ぶる拳闘娘 リ・ネッタさん^{くわう}の攻防

「美しい耳と赤目赤パン女に聞わかるな」

「ねえ、重ねられてくれない？」
「あいに声を掛けられたら、何度か酒場で腹合いをして飲むのが筋筋る探検士がそこだ。」
大地震によつて倒れた山で盗み出した古代遺跡
その遺物探しを生業としている彼ら。
こちらが傭兵なの。傭兵は盗み出たものだらう。
「あんたとは年齢が誤ったな。今、タトト十ヶつたが、
集所は？」
「旅館は？」
旅館は旅館で、旅館から少し行ったところだよ。

「安心だ。

「…旅館の安さの理由はなんだ？ 相場の半値でいいから。」
「今は手持ちがそんなにない、お腹悪い。」
「だからといつて、気が乗らないな…。」
「まだ手付かの遺跡なのよ。まことに。」
「それは…珍しくはあるが、」
「遺物が見つかった時は、山分けしていくわ。」
「普通、古代の装飾品や貨幣等…持ち帰れば現金でできる。
普通、探検士が苦労し収集した品を売ることはない。
わけでもらうことにはまずないので、安前のいい話。」
「なぜこつらは代金をもらひ人口の安全を確保するの遺跡で。」
「いいだろう、受けよう。」
「ありがとう、お腹いへ。」
未開の遺跡ならば手付かずの遺物も期待できる。
そうすれば、旅費も枚は超えるだろう。「いいから早くその宿をこなす。」
「心細い男が見たら群がつてくるぞ。」
「こいつなら、あたしのブレイドを活かした全力を…！」

「美しい耳と赤目赤パン女に聞わかるな」

「あんたをここに置いていくよ。」
「え…ええ…？」
「もう止とまりつくなかよ？」
「…こちらは今はから周がある。あの道跡で話せることはない。」
「わかつたな？」
「俺は劍を取りて後から離れる。」
これでやつとあいつの宿に向かえる。
「…こんななくさん、あきらめたの初めてよ…。」
「人聞きが悪い、おしゃれをしただけで何もしてない。」
「何も…あたし一类女をバカにしておいて…。」
「いいから早くその宿をこなす。」
心細い男が見たら群がつてくるぞ。」
「こいつなら、あたしのブレイドを活かした全力を…！」

「美しい耳と赤目赤パン女に聞わかるな」